消えた街角:富岡畦草・記録の目シリーズ

昭和34年「中央通りの京橋」

銀座側から見た京橋。この橋は昭和四年に架け替えられたもの。慶長八年（１６０３）に日本橋と同時の架橋とみられる京橋は、外堀と八丁堀を結ぶ運河で、日本橋に劣らず繁栄した。すぐ右が白魚河岸、左が大根河岸で、その名の通り鮮魚、農産物の市場としてにぎわった。特に大根河岸は、昭和八年に築地の中央卸売市場ができてからも、しばらく続いたという。

五街道の一つ、東海道に架かる橋の中でも、日本橋、京橋、新橋は別格で、橋の主柱に擬宝珠の飾りが許された。昭和三十四年、堀が埋め立てられ、橋が撤去された上に、首都高速道路が開通したのは、昭和三十七年の暮れである。常に東京の中心街として栄えた京橋辺りには、由緒ある建物が多い。写真の正面にドームをいただく大きなレンガが造りの建物は、第一生命相互館、大正十年（１９２１）完成した。ドームの高さ40メートルで、当時は東京一の高層建築であったが、惜しまれつつ昭和四十六年に建てかえられた。その手前、やはりドームをいただく建物は、昭和三年に建った富国銀行で、後には浜野繊維が使用した。昭和五十六年、東京建物京橋ビルに建て替わり、伊奈製陶が入っている。

ちなみに、この橋を渡る中央通りの都電は、昭和四十二年十二月にすべて消えた。

（昭和三十四年十月十三日撮影）

京橋は、慶長8年前後に京橋川の上に架けられたと伝わる古い橋で、現在の地名の由来になっている。その後、明治8年に木造から石造に架け替えられた。京橋川も昭和34年に埋め立てられ、当時の橋の面影は親柱が残っているのみである。だが、親柱は歴史的、文化的に価値のあるものとされ、中央区の区民有形文化財に。写真左に見える三角屋根の建物は京橋交番。京橋に相応しく橋の親柱を型どって造られている。今ではすっかりビジネス街に変貌した京橋だが、実は仲通りに入ると骨董商や美術商が集中し、昔ながらの雰囲気を残したままである。

（平成13年5月2日　撮影）

写真・文　富岡畦草（とみおか　けいそう）
大正15年8月、三重県生まれ　日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員